オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

ナツメ

オプション教材ナツメ　読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

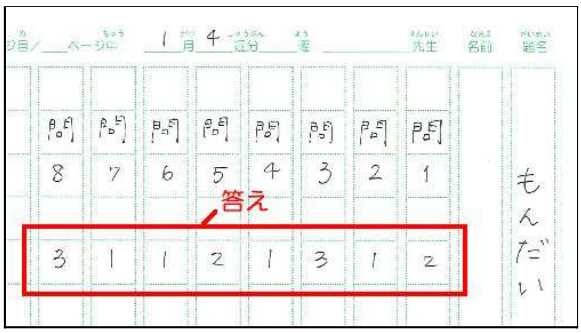
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

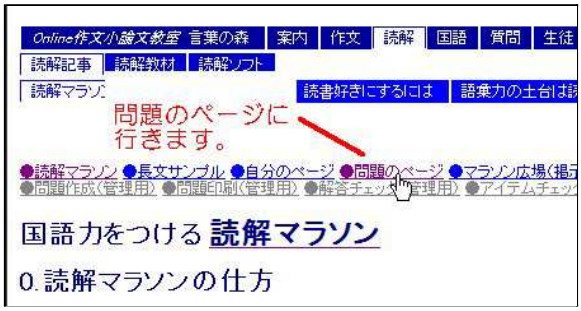
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

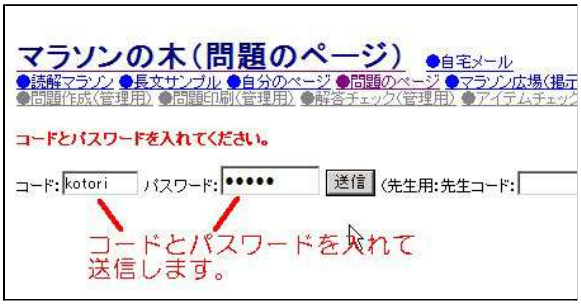


▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

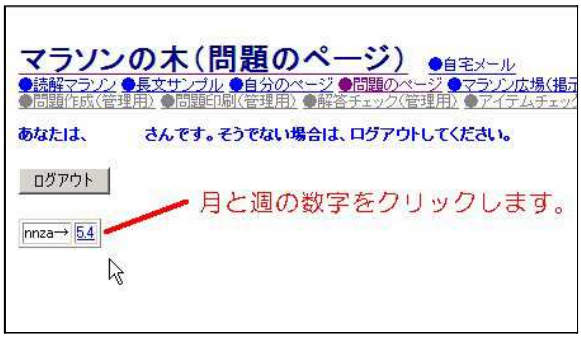
1.



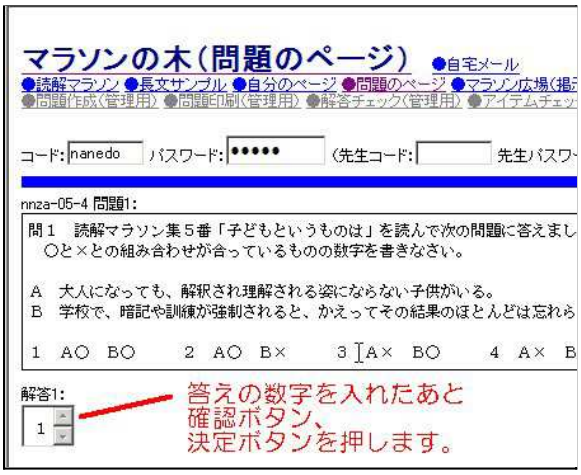
2.



3.



4.



5.

ジュースを飲んだら空き缶が残りますね。それをポイとゴミ箱に捨てる。その先、そのゴミがどこでどのように処分されているのかを知らなくても、私たちが学校で、家で、街で出したゴミは誰かがどこかに持っていってくれています。

だからいままで、みんな知らん顔をしてすんでいました。少なくとも、自分たちの生活している範囲には、ゴミはあふれていない。ゴミが「見えなく」なっているのです。ところがいま、ゴミの行き先がパンクしつつあります。もう無関心ではいられなくなった。ものがあふれる、現代の使い捨て時代では、ものとおなじだけゴミもあふれているのです。ゴミが増えたから、ゴミ焼却炉を新しくつくったり、新しいゴミ埋立て地を増やすという、まるでいたちごっこが、日本中で繰り広げられています。しかし、それには必ず限界があるのです。

じゃあ、ゴミ問題を解決する手立てはあるのだろうか。私たちは何をすればいいのだろうか。ゴミ問題の根本的な解決策を考える前に、まずなぜこんなにゴミが増えてしまったのだろうか。そんなところから、考えることをはじめてみたいと思います。

私たちは、一週間に何回かビニールの袋に入ったゴミを出します。ゴミ収集所にゴミを持っていくとわかるのですが、普通の家から持ち出されるゴミがびっくりするほど多いんです。ビニール袋に一杯入ったものがいくつもいくつも積み上げられている。いったい何がその中に入っているのか。とにかく大変なかさだし、重さでしょう。ゴミは、生活すれば当然出るものだといえば出るものです。しかし、あんなにたくさん出さなければ本当は生きていけないのでしょうか。いまの私たちの暮らしがあたりまえだと思えば、たくさんのゴミが出るのもあたりまえなんですが、ちょっと振り返ってみると、戦時中、あるいは戦後しばらくはこんなにゴミの量は多くなかったんです。

（槌田劭編「地球をこわさない生き方の本」）

つゆのまだ晴れきらない、どんよりした日の午後のことでした。

次郎は、その日、村の子どもたち五、六人といっしょに学校から帰ってきていましたが、村の入り口に近い農家の前までくると、その庭先に、顔なじみの牛肉屋さんが、ちょうど荷をおろそうとしているところでした。この村に牛肉屋さんがやってくるのはめずらしいことで、せいぜい月に一度ぐらいでしたが、その顔は、きまっていましたし、子どもたちにとっては、それがめずらしいだけに、かえってわすれられない顔だったのです。

子どもたちは、とびつくように、すぐそのまわりを取りかこみました。そして、赤黒い、あぶらけのない肉が、出刃の動きにつれて、つぎつぎにきざまれていくのを、息をつめて見ているのでした。むし暑い空気の中に、なまぐさい、いやなにおいがただよってきましたが、そんなにおいまでが、みんなの鼻には、めずらしい香料のにおいでもあるかのように流れこんでいるのでした。

次郎は、しかし、もうそんなことには、たいして心をひかれませんでした。かれは、ほんのちょっとだけ、みんなのうしろから、それをのぞいただけでした。が、のぞいたとたん、ふと、かれの頭に浮かんできたことがありました。それは、病気のかあさんが毎日飲んでいるスープのことでした。

「かしわ（鶏肉）のスープには、もうあきあきしましたわ。」

「そう？　でも、がまんして飲まないと、精がつかないよ。」

「やっぱり、かしわのスープでないと、いけませんかしら。同じスープでも、変わったものだと、よさそうに思いますけど。」

「そうねえ、それは牛肉だっていいだろうともさ。こんど肉屋さんがきたら、一度、牛肉でこさえてみようかね。」

かれは、肉屋さんのまないたの上にきざまれていく肉の切れに、もう一度目をやりながら、頭の中で、自分のつくえの引き出しにしまってある、おこづかいのたかを勘定してみました。それは五十銭ぐらいあるはずでした。かれは、それを思いあたると、きゅうに胸がわくわくしてきました。そして、上気したように顔をほてらせ、みんなの顔を見まわしたあと、やにわに家のほうにむかって走りだしました。

（下村湖人「次郎物語」）

読解マラソン集 ３番 人間にとって一生のうちで na3

人間にとって一生のうちで、いちばん大事な時期はいつごろでしょうか。これは愚問かもしれません。人生のなかで大事でない日などというのは、一日たりとてないからです。けれど、いちばん幸福な日々はいつかと問われたなら、私は確信をもって、少年時代、と答えます。むろん、何をもって幸福と言うか、その考え方はさまざまでしょう。しかし、私自身、自分の五十年にわたる歳月をふりかえってみて、ちゅうちょなくそう断言できるように思います。

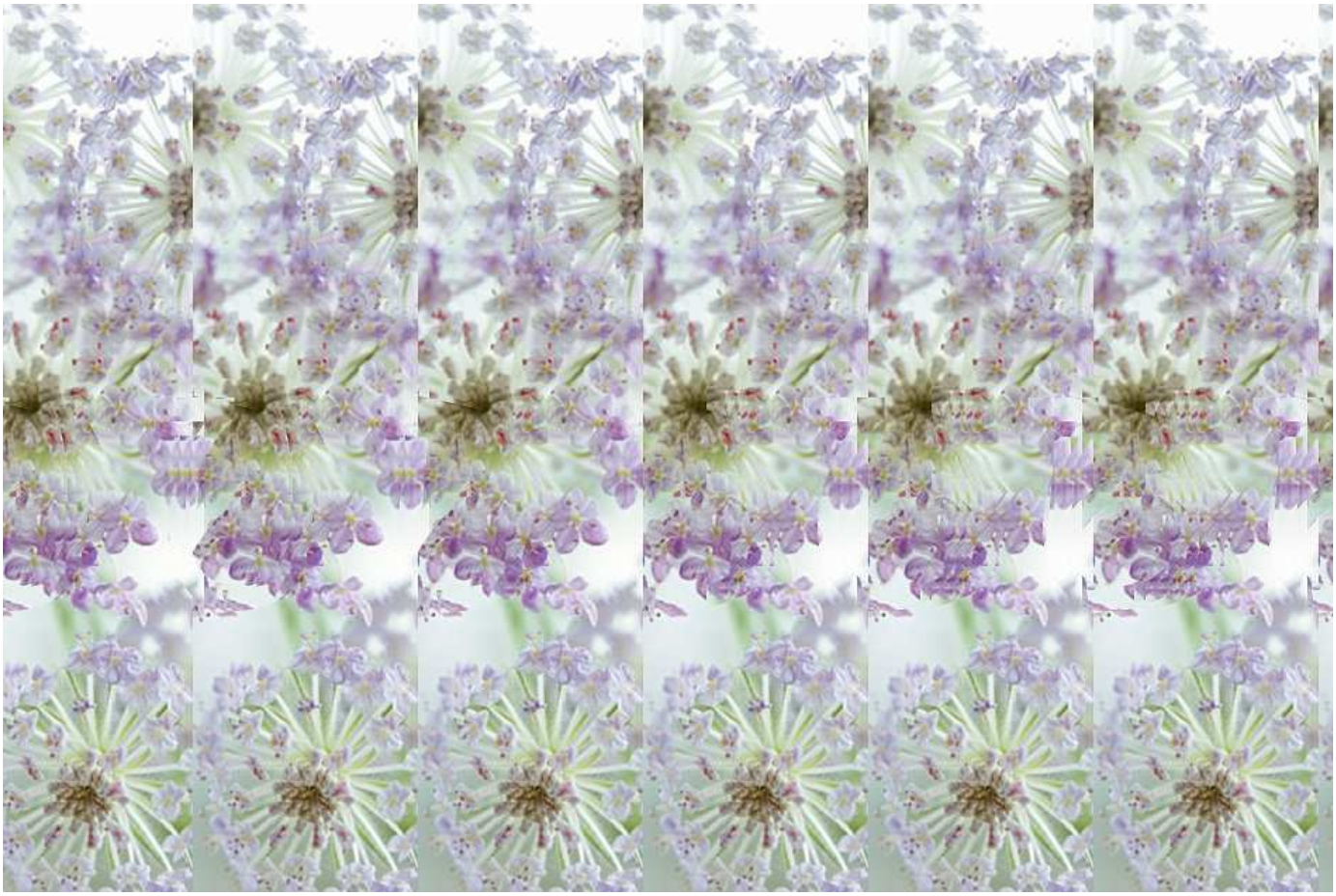
と言っても、その少年時代に私は自分が幸福であるなどとは少しも思いませんでした。おそらく、だれでもそうでしょう。少年のころ、あるいは少女のころは、自分が幸福などと思わないくらい幸福なのです。たとえ、どれほど苦しい環境にあっても、です。

なぜなのだろう、と私はときどき考えます。端的に言えば、何につけても夢中になることができるからではないでしょうか。

そんなことはない、大人になってからでも夢中になれる、と言うかもしれません。たしかに夢中になれるでしょう。けれど、その夢中になるなり方がちがうのです。少年のころは、まったく我をわすれて没頭できる。純粋に夢中になれる。しかし、大人になると、たとえ何かにどれほど夢中になっても、かならずほかのことへの配慮が働いています。ほかのことが気になりつつ、あることに熱中しているにすぎません。

（森本哲郎「ことばへの旅」）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



いったい、ジャングルの破壊は何が原因なのでしょうか。

こうした地球的規模の問題には、次にあげるふたつの大きな、根本的な原因があると思います。ひとつは、ジャングルがある国はいずれも発展途上国であり、貧しいこと。もうひとつは、先進国のむだの多いライフスタイル（暮らし方）です。

まず発展途上国の場合は、人口増加にともなって、ジャングルを大規模に切り開いて農地にしたり、都市の人々を移住させたりしています。また薪木の消費量が多くなり、森がどんどんへっているため、女性は何時間もかけて遠くの森まで薪木を拾いに行かなくてはならないような状況も生じています。薪木が手にはいりにくくなったからといって、燃料をガスや電気にかえることもできません。こうした結果が、ジャングルの破壊につながっているケースもあります。

また発展途上国にとっては、ジャングルの木々が重要な資金源でもあります。ジャングルは自然がつくったものですから、新たに何かをつくり出す必要がなく、切って輸出すればお金になります。マレーシア、インドネシア、フィリピンなど、ジャングルの破壊が大きな問題になっている国では、いずれも木材の輸出が国の経済の柱となっています。

しかし発展途上国の経済を支える熱帯の木材も、価格は今、戦後最低です。結局、今の世界全体の経済構造そのものが、豊かな先進国が動かしているような感じですから、いつも買いたたかれてしまうんです。安いから、いくら切って売っても、たいしてお金にはならなくなってしまっています。

ただでさえ苦しい国の経済状況に加えて、外国からの借金も返さなくてはなりません。そのためには、ジャングルを伐採するのもいたしかたない、伐採をやめるわけにはいかないという事情があるのです。

そのいっぽう、豊かな先進国では使い捨てのものがふえるなど、むだの多い暮らし方が広まっています。これも、ジャングルを減少させているのです。

たとえば、ファストフードの代表格であるハンバーガー。とくに欧米のハンバーガーをつくるための安い牛肉は、中南米産がほとんどです。中南米のジャングルは、この肉牛用の大規模な牧場建設のために、半分以上がなくなってしまったのです。

豊かな先進国では、ハンバーガーを食べなくても、他に栄養源はいくらでもあります。木材にしても、なにも熱帯の木でなくてもかまわないでしょう。つまり、先進国の人々には選択の余地がいくらでもあり、その暮らし方を少し変えさえすれば、ジャングルの減少や破壊をくいとめられます。

焼畑農業にしてもそうですが、これまでジャングルの伐採に関する主だった研究は、先進国の人間によって行われてきました。出版された本も、先進国の立場から見たものが多かったのです。

過去にこんな例がありました。先進国によってジャングルに木を植えるという試みが行われたのですが、木は育ったものの、ジャングルに住む人々にとっては、ちっとも役に立たなかったのです。

植えられた木はやせ地でも、比較的育ちやすく、生長の早いユーカリやアカシアなどでした。これらの木は、二年もたてば五メートルくらいになるのです。ところが早く、大きく育つのは結構なのですが、これらの木が他の木に必要な養分も全部奪ってしまいます。ですからそこは、ユーカリやアカシアだけの森となり、もとのジャングルとは似ても似つかぬ姿になってしまうのです。そんな森には、動物や鳥もすみつかなくなるでしょうし、そうなったら、人々はその森から食べ物はおろか、肥料も飼料も得られなくなってしまいます。

この例からもわかるように、「科学」や「技術」、「開発」とはなにか、だれのためのものか、あらためて考え直してみることが必要だと思います。

（生きている森編集委員会編「未来の森　森があぶない」）

わが家の遠足のお弁当は、海苔巻であった。

遠足の朝、お天気を気にしながら起きると、茶の間ではお弁当作りが始まっている。一抱えもある大きな瀬戸の火鉢で、祖母が海苔をあぶっている。黒光りのする海苔を二枚重ねて丹念に火取っているそばで、母は巻き簾を広げ、前の晩のうちに煮ておいた干ぴょうを入れて太目の海苔巻を巻く。遠足にゆく子供は一人でも、海苔巻は七人家族の分を作るのでひと仕事なのである。

五、六本出来上ると、濡れ布巾でしめらせた包丁で切るのだが、そうなると私は朝食などそっちのけで落ちつかない。海苔巻の両端の、切れっ端が食べたいのである。

海苔巻の端っこは、ご飯の割に干ぴょうと海苔の量が多くておいしい。ところが、これは父も大好物で、母は少しまとまると小皿に入れて朝刊をひろげている父の前に置く。父は待ちかまえていたように新聞のかげから手を伸ばして食べながら、

「生水を飲まないように」

「知らない木の枝にさわるとカブレるから気をつけなさい」

と教訓を垂れるのだが、こっちはそれどころではない。端っこが父の方にまわらぬうちにと切っている母の手許に手を出して、

「あぶないでしょ。手を切ったらどうするの」

とよく叱られた。

結局、端っこは二切れか三切れしか貰えないのだが、私は大人は何と理不尽なものかと思った。父は何でも真中の好きな人で、かまぼこでも羊羹でも端は母や祖母が食べるのが当り前になっていた。それが、海苔巻に限って端っこがいいというのである。

竹の皮に海苔巻を包む母の手許を見ながら、早く大きくなってお嫁にゆき、自分で海苔巻を作って、端っこを思い切り食べたいものだと思っていた。戦争激化と空襲で中断した時期もあったが、それでも小学校・女学校を通じて、遠足は十回や十五回は行ってい

る。だが、どこへ行ってどんなことがあったか、三十数年の記憶の彼方に霞んではっきりしない。目に浮かぶのは遠足の朝の、海苔巻作りの光景である。

ひと頃、ドラキュラの貯金箱が流行ったことがある。お金をのせると、ジイッと思わせぶりな音がして不意に小さな青い手が伸びて、陰険というか無慈悲というか、嫌な手つきでお金を引っさらって引っこむ。何かに似ているなと思ったら、遠足の朝、新聞のかげから手を伸ばして海苔巻の端っこを食べる父の手を連想したのだった。

我ながらおかしくて笑ったが、不意に胸の奥が白湯でも飲んだように温かくなった。親子というのは不思議なものだ。こんな他愛ない小さな恨みも懐かしさにつながるのである。

（向田邦子「父の詫び状」）

――気圧のせいで、耳がへんなんだ……。

サトルはつばを飲みこんだり、鼻をつまんで息をむりやり吹きだしてみたりする。プールに深くもぐって耳がへんになったときにも、おなじようにした。

ガサッと音がして、まわりの音がちゃんときこえるようになった。エンジンがゴーゴーとうなっている。うるさいけれど、耳につまっていたものがとれたみたいで、気持ちがいい。

雲の層からでると、窓のそとに真っ暗な空がひろがった。機体が、すこしななめにかたむく。かたむきながら、すべるようにおりていく。銀色のフラップが、めくれるように上にあがった。

宇宙へとつながる夜空の下に、光のじゅうたんをひろげたような街の明かりが見えてきた。

オレンジ色の光の線と、星のような緑色の光の点滅。そのあいだをぬって動く赤い光の帯は、道を走る車たちのテールランプだろうか。

――なんて大きな街なんだ。まるでＳＦ映画の未来都市みたいだ……。

サトルは口を半開きにしたまま、目をうばわれている。光のじゅうたんの、はしからはしまでが見わたせない。真っ暗な空の下ぜんぶがキラキラ光っている。飛行機はつばさをしならせて、星雲の中心にすいこまれるようにして高度を下げていく。

サトルは、さっきまでサッカーのゲーム機をピコピコやっていたが、いまは、その小さなボタンを押すこともわすれて、目の下のまぶしい世界をのぞきこんでいる。

光の海がぐんぐん近づいてくる。明かりのついたたくさんの窓がならんだビルや、高速道路が自分の目の高さとおなじになり、オレンジや緑の光が線になって、うしろに飛んでいく。

体がうくような感じがして、ドンッとおしりが下からつきあげられた。着陸すると、四つのエンジンがものすごい音をだして逆噴射した。飛行機のスピードが見るまにおそくなる。窓のそとのけしきが、ゆっくりと流れていく。

飛行機はまだ滑走路の下をすべっているのに、となりの席のお父さんは、もうシートベルトをはずしてしまった。ほかの人たちはまだじっとすわっているのに、お父さんだけがそわそわして落ちつきがない。

飛行機に乗っているあいだじゅう、ずっとそうだった。分厚い書類のたばをめくったり、ノートパソコンのキーをカチャカチャたたいたりして、ともかくじっとしていなかった。

サトルは、なにもしないでぼーっとしているお父さんを見たことがない。だまって遠くを見ていたり、目を閉じてなにかを考えているようなお父さんを見たことがない。いつもなにかしていて、いつもいそいでいる。いつも「いそがしい、いそがしい。」といい、そして、ときどき「つかれた。」とため息をつく。だからサトルは、そんなお父さんとちゃんと話をしたことがない。

――だれのお父さんも、みんなおなじようにいそがしいのだろうか。それとも、ぼくのお父さんはとくべつなのだろうか……。

サトルは、ときどきそんなことを考える。

（戸井十月「カチーナの石」）

「疲れて帰ってきてみりゃ、姉妹でとっくみあいの喧嘩か。どうして仲良くできないんだ。女の子同士だろ」
事情も聞かないで頭から怒鳴るお父さんを私は睨みつけた。私の反抗的な目を見て、お父さんの口もとがまた歪む。
その時、花乃姉ちゃんがお父さんの肩にそっと手を置いた。
「お父さん、ごめんなさい。私が悪いの。」
その絶妙なタイミングに、私は口を開けて花乃ちゃんを見た。
「実乃が悪いんじゃないのよ。私にお客さんが来て、それでご飯を作る時間がなかったから……」
そう呟いて、彼女は目尻を指で拭った。涙なんか出てやしないのに。
お父さんはしばらくモグモグと口を動かしていた。私もここで
「ううん、私も悪いの。花乃ちゃん、お父さんごめんなさい」って
しおらしく謝れば、この場がおさまることぐらい分かってた。でも、私はそんなクサいお芝居はしたくない。
唇を噛んでそっぽを向くと、お父さんが私の背中にこう言った。
「実乃も花乃みたいに素直になってみろ。そうすりゃ、俺だってこんなに怒らないんだ」
それを聞いて私は立ちあがった。
「……今日はお寺に泊まってくる」
「実乃お前な。自分に都合が悪いとすぐ寺へ逃げるけどな……」
お父さんの言葉を最後まで聞かず、私は靴を履いて玄関を出た。門のところで振り返ったけれど、お父さんもお姉ちゃんも追いかけてこなかった。
（中略）
月を見あげて私は涙を拭った。
お姉ちゃんの嘘泣きの陰で私は本当に泣いているのに、どうしてお父さんは分かってくれないんだろう。お父さんの目には、反抗的な私より素直なふりした花乃ちゃんのほうがいい子に映っているに違いない。
私は悪くない。悪いのはお姉ちゃんだ。悪いのは、花乃ちゃんに簡単にだまされるお父さんだ。
なのに、私はお寺への階段が登れなかった。永春さんの懐に泣きついて、みんなが私に意地悪をすると訴えられなかったのはなぜだろう。
私は街灯の下にしゃがんで膝を抱えた。
でも、もしかしたら。
お父さんの言うとおりなのかもしれないって、私は心の隅っこで思ってる。
素直じゃなくて、何かと言うと「でも」とか「だって」とか私は言い訳してる。それで都合が悪くなると、こうやって永春さんのところへ逃げこもうとする。悪いのはみんな他の人で、私はちっとも悪くないなんて思ってることが、私の一番悪いところなのかもしれない。

（山本文緒「チェリーブラッサム」）

南博人は従順な子であり、いたずらっ子でもあった。先生に反抗らしい態度に出たことは一度もなかった。しかし彼は、そのとき、先生が言った最後の言葉に疑問を持った。ひとりで山へ入ったならば、自力で頂上へ出ることは困難であるということに嘘を感じた。札幌の郊外にある藻岩山は、彼が生まれた時から馴れた山だった。道をそれても、上へ上へと登っていけばやがては頂上へ出られる筈である。それは小学校五年生の理屈であった。

「おい、南どうした」

列が動き出しても頂上の方も見詰めたまま突立っている南に不審をいだいて隣の少年が話しかけた。

「おれは、山の中へ入る。先生に言うなよ、言ったら、げんこつくれてやるぞ」

南の受持ちの先生のあだなはげんこつ先生である。悪いことをすると、げんこつをくれるからである。南はげんこつ先生の真似をして、隣の少年をげんこつでおどかしてやぶの中へ飛びこんだ。やぶの中を頂上まで登る気はなかった。道をそれたら、頂上へ出られないという先生のことばが、ほんとうか嘘かたしかめたかったし、同時に彼は山の中がどんな構造になっているかも知りたかった。彼はクラスで走るのは一番速かったから、五分や十分の道草を食っていても、直ぐ追いつける自信があった。それにげんこつを見せた以上、誰かが先生に告げ口をするということはまず考えられなかった。彼は餓鬼大将だった。

彼はやぶへ入った。木が密生している間をかいくぐっていくと、木の芽の強い芳香が彼の鼻をくすぐった。彼は幾度かくしゃみをした。くしゃみが誰かに聞えはしないかと、耳を済ませたが、もう少年たちの足音は聞えなかった。

彼はにっこり笑った。たいへん面白い考えが浮かんだからである。少年たちは六十名いた。彼等が先生に引率されて頂上に達するまでに、先廻りをして頂上に行ってやろうという野望を起したのである。先廻りをした罪で、げんこつ先生に一つぐらいげんこつを頂だいしてもかまわないと思った。

彼は森の中を頂上目がけて登り出したが、道のないところを登ることがいかに困難であるかを知ると、彼自身のやっていることが、かなり冒険であることに気がついた。

彼はもと来た道へ引き返そうとして、そっちの方へ移動したが、道らしいものはなく、いよいよ樹木の深みにはまりこんでいった。彼はひどくあわてた。彼は幾度か叫ぼうとしたが、声は咽喉で止った。彼は眼に泪をためた。先生のいうとおりだとすれば、さっき彼がたてた理屈がおかしくなる。頂上は一つだ、登っていけば必ず頂上に行き当る筈だ。

彼は気を取り直した。道を探すことはやめて、一途に頂上を目ざして直登していった。必ず頂上があると思いこんでいれば、道に迷ったことも、朋輩たちと別れたことも、先生に叱られることも、少しも怖くはなかった。

高い方高い方へ登っていくと、少しずつ明るさが増して来ることが彼にとって希望だった。明るさが増して来ることは、頂上に近づいていることだとは分らなかった。やがて彼は道とも踏み跡ともつかないものに行き当った。そこを登っていくと、ややはっきりした山道に出会い、そこから頂上までは楽な登りだった。

げんこつ先生は真青な顔をして待っていた。

（新田次郎「神々の岸壁」）

私たち脳の研究者は記憶の研究材料として「ネズミ」をよく使います。記憶力がもっとも優れている動物は人間ですから、なぜ人間を使わないのかという疑問をもつ読者もいるかもしれませんが、ネズミを使って実験するほうが好都合な部分もあるのです。たとえば、人とくらべてネズミのほうが純粋な記憶をしてくれるということが挙げられます。ネズミの記憶のほとんどが本能に根ざしたものですから、人間のように「今日はだるいな」「面倒くさいな」「早く終わらないかな」などということで記憶力が左右されません。昨日は覚えたけど今日はだめだとか、このネズミは覚えるけど別のネズミはだめ、などという「気まぐれ」や「ばらつき」が少ないのです。「記憶」という抽象的でとらえにくい対象を研究する場合、実験の妨げとなる目に見えない要因が少ないということは、とても大切なことです。こうした理由で、私の研究室でも主にネズミを使用しています。

ネズミを使ったオペラント条件づけの方法を図１５（省略）に示しました。これはスキナー箱とよばれる装置です。この箱の中では、ブザー音が鳴ったときにレバーが押されると餌が出てくる仕組みになっています。簡単なテストなのですが、第一章で説明した水迷路試験にくらべるとかなり高度な課題ですから、さすがに何回か訓練を積まないと学習できません。そして、この箱に入れられたネズミがどのように学習していくかを観察していると、とてもおもしろい事実が見えてきます。

当然、ネズミにとってスキナー箱は生まれて初めて見るものです。目の前のレバーがなんの役割をしているのかは知りません。そもそも、レバーは押すものであるということさえも理解していないのです。しかも、突然ブザー音が鳴ったりします。まさに、戸惑うばかりの部屋です。そんなあるとき、偶然にレバーが押されて、おいしい餌が出てきます。初めは単なる偶然です。しかし、この偶然が何回か続くと、「レバーを押すこと」と「餌をもらえること」の因果関係に気づきます。ここまでが学習の第一段階です。

この段階まで到達すると、ネズミは餌欲しさに、ひたすらレバーを押します。しかし、レバーを押したからといって必ずしも餌にありつけるわけではありません。ブザーが鳴っていないときにレバーを押しても餌が出てこないからです。何度か失敗を繰りかえすうちに、ようやくこの事実に気づきます。そして、ついにブザーとレバーの因果関係を理解して、ネズミのオペラント学習が完成します。何十回、何百回という試行錯誤を繰りかえして、ネズミはこの課題を記憶するのです。

この過程でネズミは数多くの失敗をします。ああでもない、こうでもない、とさまざまな失敗をして、その結果、ブザーとレバーの関係に気づくのです。つまり、ひとつの成功を導きだすために、多くの失敗が繰りかえされるわけです。逆に、こうした数多くの失敗がなければ正しい記憶はできません。つまり、記憶とは「失敗」と「繰りかえし」によって形成され強化されるものなのです。

これはコンピューターとはかなり異なります。コンピューターは一回で完全に記憶できます。しかも正解だけを完璧に覚えるのです。脳ではそうはいきません。正解を導くためには試行錯誤が絶対に必要です。失敗をして、それを基礎としてつぎに何をするかを考え、そしてまた失敗をして……という具合です。脳の記憶とは、いわば「消去法」のようなものです。これはちがう、あれはちがうと試行していくのです。

つまり、覚えるということは「努力」と「根気」なのです。

（池谷裕二「記憶力を強くする」）

わたしは窓を開いて見ました。
「サワン！　大きな声で鳴くな」
けれどサワンの悲鳴はやみませんでした。窓の外の木立はまだこずえにそれぞれ雨滴をため、もしも幹に手をふれると、幾百もの露が一時に降りそそいだでありましょう。けれど、すでによく晴れわたった月夜でありました。
わたしは外に出て見ました。するとサワンは屋根のむねに出て、その長い首を空に高くさし伸べて、かれとしてはできるかぎり大きな声で鳴いていたのです。かれが首をさし伸ばしている方角の空には、夜ふけになって上る月のならわしとして、赤くよごれたいびつな月が出ていました。そうして、月の左手から右手の方向にむかって、夜空に高く三羽のがんが飛んでいるところでした。わたしは気がつきました。この三羽のがんとサワンは、空の高いところと屋根の上で、互いに声に力をこめて鳴きかわしていたのです。サワンがたとえば声を三つに切って鳴くと、三羽のがんのいずれかが声を三つに切って鳴き、かれらは何かを話しあっていたのに違いありません。察するところサワンは三羽の僚友たちにむかって、
「わたしをいっしょに連れて行ってくれ！」
と叫んでいたのでありましょう。
わたしはサワンが逃げ出すのを心配して、かれの鳴き声にことばをさしはさみました。
「サワン！　屋根から降りてこい！」
サワンの態度はいつもとちがい、かれはわたしの言いつけを無視して、三羽のがんに鳴きすがるばかりです。わたしは口笛を吹いて呼んでみたり、両手で手招きしたりしていましたが、ついにたまらなくなって、棒ぎれで庭木の枝をたたいてどならなければならなくなりました。
「サワン！　おまえはそんな高いところへ登って、危険だよ。早く降りてこい。こら、おまえどうしても降りてこないのか！」
けれどサワンは、三羽の僚友たちの姿と鳴き声がまったく消え

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

去ってしまうまで、屋根の頂上から降りようとはしなかったのです。もしこのときのサワンのありさまをながめた人があったならば、おそらく次のような場面を心に描くことができるでしょう――遠い離れ島に漂流した老人の哲学者が、十年ぶりにようやく沖を通りすがった船を見つけたときの有様――を人々は屋根の上のサワンの姿に見ることができたでしょう。
サワンがふたたび屋根などに飛び上がらないようにするためには、かれの足をひもで結んで、ひもの一端を柱にくくりつけておかなければならないはずでした。けれどわたしはそういう手荒なことを遠慮しました。かれに対するわたしの愛着を裏切って、かれが遠いところに逃げ去ろうとはまるで信じられなかったからです。わたしはかれの翼の羽を、それ以上に短くすれば傷つくほど短く切っていたのです。あまりかれを苛酷に取り扱うことをわたしは好みませんでした。
ただわたしは翌日になってから、サワンをしかりつけただけでした。
「サワン！　おまえ、逃げたりなんかしないだろうな。そんな薄情なことはよしてくれ」
わたしはサワンに、かれが三日かかっても食べきれないほど多量のえさを与えました。
サワンは、屋根に登って必ずかんだかい声で鳴く習慣を覚えました。それは月の明るい夜にかぎり、そして夜ふけにかぎられていました。そういうとき、わたしは机にひじをついたまま、または夜ふけの寝床の中で、サワンの鳴き声に答えるところの夜空を行くがんの声に耳を傾けるのでありました。その声というのは、よほど注意しなければ聞くことができないほど、そんなにかすかながんの遠音です。それは聞きようによっては、夜ふけそれ自体が孤独のためにうち負かされてもらす歎息かとも思われ、もしそうだとすればサワンは夜ふけの歎息と話をしていたわけでありましょう。
その夜は、サワンがいつもよりさらにかんだかく鳴きました。ほ

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

とんど号泣に近かったくらいです。けれどわたしは、かれが屋根に登ったときにかぎってわたしのいいつけを守らないことを知っていたので、外に出て見ようとはしませんでした。机の前にすわってみたり、早くかれの鳴き声がやんでくれればいいと願ったり、あすからはかれの羽を切らないことにして、出発の自由を与えてやらなくてはなるまいなどと考えたりしていたのです。そうしてわたしは寝床にはいってからも、たとえばものすごい風雨の音を聞くまいとする幼児が眠るときのように、ふとんを額のところまでかぶって眠ろうと努力しました。それゆえ、サワンの号泣はもはや聞えなくなりましたが、サワンが屋根の頂上に立って空を仰いで鳴いている姿は、わたしの心の中から消え去ろうとしませんでした。そこでわたしの想像の中に現われたサワンもかんだかく鳴き叫んで、実際にわたしを困らせてしまったのでありました。

　わたしは決心しました。あすの朝になったら、サワンの翼に羽の早く生じる薬を塗ってやろう。新鮮な羽は、かれの好みのままの空高くへ、かれを飛び立たせるでしょう。万一にもわたしに古風な趣味があるならば、わたしはかれの足にブリキの指輪をはめてやってもいい。そのブリキには、「サワンよ、月明の空を、高く楽しく飛べよ」ということばを小刀で彫りつけてもいい。

　翌日、わたしはサワンの姿が見えないのに気がつきました。

「サワン、出てこい！」

　わたしは狼狽しました。廊下の下にも屋根の上にも、どこにもいないのです。そしてトタンのひさしの上には一本の胸毛が、あきらかにサワンの胸毛であったのですが、トタンの継ぎ目にささって朝の微風にそよいでいます。わたしは急いで沼地へ捜しに行きました。

　そこにはサワンはいないらしい気配でした。岸にはえている背の高い草は、その茎の先にすでに穂をつけて、わたしの肩や帽子に綿毛の種子が散りそそいだのであります。

「サワン、サワンいないか。いるならば、出てきてくれ！　どうか頼む、出てこい！」

　水底には植物の朽ちた葉が沈んでいて、サワンは決してここにもいないことがわかりました。おそらくかれは、かれの僚友たちの翼にかかえられ、かれの季節向きの旅行に出ていってしまったのでありましょう。

（井伏鱒二「屋根の上のサワン」）

まったくくまどもは小十郎の犬さえすきなようだった。
けれどもくまもいろいろだから、気の烈しいやつならごうごうほえて立ちあがって、犬などはまるで踏みつぶしそうにしながら、小十郎のほうへ両手をだしてかかっていく。小十郎はぴったり落ちついて、樹をたてにして立ちながら、くまの月の輪をめがけてズドンとやるのだった。
すると森までがあっと叫んでくまはどたっとたおれ、赤黒い血をどくどく吐きはなをくんくん鳴らして死んでしまうのだった。
小十郎は鉄砲を木へたてかけて注意深くそばへ寄ってきて、こういうのだった。
「くま。おれはてまえをにくくて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射たなけぁならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが、畑はなし、木はお上のものにきまったし、里へ出てもたれも相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞしるんだ。てめえもくまに生まれたが因果なら、おれもこんな商売が因果だ。やい。このつぎにはくまなんぞに生まれなよ。」※
そのときは犬もすっかりしょげかえって目を細くしてすわっていた。
何せこの犬ばかりは小十郎が四十の夏、うちじゅうみんな赤痢にかかって、とうとう小十郎の息子とその妻も死んだ中に、ぴんぴんして生きていたのだ。
それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して、くまのあごのとこから胸から腹にかけて、皮をすうっとさいていくのだった。それからあとの景色はぼくは大きらいだ。けれどもとにかくおしまい小十郎が、まっ赤なくまの胆をせなかの木のひつにいれて、血で毛がぼとぼと房になった毛皮を谷であらって、くるくるまるめ、せなかにしょって、自分もぐんなりしたふうで谷をくだって行くことだけはたしかなのだ。

（中略）

ところがこの豪儀な小十郎が、まちへくまの皮と胆を売りに行くときのみじめさといったら、まったく気の毒だった。
町のなかほどに大きな荒物屋があって、ざるだの砂糖だの砥石だの、金天狗やカメレオン印の煙草だの、それからガラスのはえとりまでならべていたのだ。小十郎が山のように毛皮をしょって、そこのしきいを一足またぐと、店ではまたきたかというように、うすらわらっているのだった。店のつぎの間に大きな唐金の火鉢をだして、主人がどっかりすわっていた。
「だんなさん、先ころはどうもありがとうごあんした。」※
あの山では主のような小十郎は、毛皮の荷物を横におろしてていねいにしきいたに手をついていうのだった。
「はあ、どうも、きょうはなんのご用です。」
「くまの皮また少し持ってきたます。」※
「くまの皮か。このまえのもまだあのままましまってあるし、きょうぁ、まんつ、いいます。」※
「だんなさん、そういわないでどうか買ってくんなさい。安くてもいいます。」※
「なんぼ安くてもいらないます。」※
主人は落ちつきはらって、きせるをたんたんとてのひらへたたくのだ。
あの豪気な山のなかの主の小十郎は、こういわれるたびにもうまるで心配そうに顔をしかめた。
何せ小十郎のとこでは、山には栗があったし、うしろのまるで少しの畑からはひえがとれるのではあったが、米などは少しもできず、味噌もなかったから、九十になるとしよりと子どもばかりの七人家内にもって行く米は、ごくわずかずつでもいったのだ。
里のほうのものなら麻もつくったけれども、小十郎のとこではわずか藤つるで編む入れ物のほかに布にするようなものはなんにもできなかったのだ。

小十郎はしばらくたってから、まるでしわがれたような声でいったもんだ。

「だんなさん、お願いだます。どうがなんぼでもいいはんて買ってくない。」※

小十郎はそういいながら改めておじぎさえしたもんだ。

主人はだまってしばらくけむりを吐いてから、顔の少しでにかにか笑うのをそっとかくしていったもんだ。

「いいます。置いでおでれ。じゃ、平助、小十郎さんさ二円あげろじゃ。」※

店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へすわってだした。小十郎はそれを押しいただくようにして、にかにかしながら受け取った。

それから主人はこんどはだんだんきげんがよくなる。

「じゃ、おきの、小十郎さんさ一杯あげろ。」

小十郎はこのころはもううれしくてわくわくしている。主人はゆっくりいろいろはなす。小十郎はかしこまって山のもようや何か申しあげている。まもなく台所のほうからお膳できたと知らせる。小十郎は半分辞退するけれども、けっきょく台所のところへ引っぱられてって、またていねいなあいさつをしている。

まもなく塩引のさけのさしみや、いかの切りこみなどと酒が一本黒い小さな膳にのってくる。

小十郎はちゃんとかしこまってそこへ腰かけて、いかの切りこみを手の甲にのせてべろりとなめたり、うやうやしく黄いろな酒を小さなちょこについだりしている。

いくら物価の安いときだってくまの毛皮二枚で二円はあんまり安いとだれでも思う。

実に安いし、あんまり安いことは小十郎でも知っている。けれどもどうして小十郎は、そんな町の荒物屋なんかへでなしに、ほかの人へどしどし売れないか。それはなぜかたいていの人にはわからない。けれども日本ではきつねけんというものもあって、きつねは猟師に負け猟師はだんなに負けるときまっている。ここではくまは小十郎にやられ小十郎がだんなにやられる。だんなは町のみんなのなかにいるから、なかなかくまに食われない。けれどもこんないやなずるいやつらは、世界がだんだん進歩すると、ひとりで消えてなくなっていく。

ぼくはしばらくの間でも、あんなりっぱな小十郎が二度とつらも見たくないような、いやなやつにうまくやられることを書いたのが、実にしゃくにさわってたまらない。

※は方言です。

（宮沢賢治「なめとこ山のくま」）

ちょうど、その前の年、僕が六年生の晩秋のことであった。
中学へ入るための予習が、もう毎日つづいていた。暗くなって家へ帰ると、梶棒をおろしたくるまが二台表にあり、玄関の上がり口に車夫がキセルで煙草をのんでいた。
この二、三日、母の容体が面白くないことは知っていたので、くつを脱ぎながら、僕は気になった。着物に着がえ顔を洗って、電気のついた茶の間へ行くと、食事のしたくのしてある食卓のわきに、編み物をしながら、姉は僕を待っていた。僕はおやつをすぐにほおばりながら聞いた。
「ただ今。――お医者さん、きょうは二人？」
「ええ、昨夜からお悪いのよ」
いつもおなかをへらして帰って来るので、姉はすぐにご飯をよそってくれた。
父と三人で食卓を囲むことは、そのころはほとんどなかった。ムシャムシャ食べ出した後に、姉もはしをとりながら、
「節ちゃん、お父さまがね」という。「あさっての遠足ね、この分だとやめてもらうかも知れないッて、そうおっしゃっていたよ」
遠足というのは、六年生だけ一晩泊まりで、修学旅行で日光へ行くことになっていたのだ。
「チェッ」僕は乱暴にそういうと、ちゃわんを姉につき出した。
「節ちゃんには、ほんとにすまないけど、もしものことがあったら。――お母さんとてもお悪いのよ」
「知らない！」
姉は涙ぐんでいる様子であった。それもつらくて、それきりだまりつづけて夕飯をかきこんだ。（中略）
生まれて初めて、級友と一泊旅行に出るということが、少年にとってどんなにみりょくを持っているか！　級の誰彼との約束や計画が、あざやかに浮かんでくる。両の眼に涙がいっぱいあふれてきた。
父の書斎のとびらがなかば開いたまま、廊下へ灯がもれている。（中略）

いつも父のすわる大ぶりないす。そして、ヒョイッと見ると、卓の上には、くるみを盛った皿が置いてある。くるみの味なぞは、子供に縁のないものだ。イライラした気持ちであった。
どすんと、そのいすへ身を投げこむと、僕はくるみを一つ取った。そして、冷たいナット・クラッカーへはさんで、片手でハンドルを圧した。小さなてのひらへ、かろうじて納まったハンドルは、くるみの固いからの上をグリグリとこするだけで、手応えはない。「どうしても割ってやる」そんな気持ちで、僕はさらに右手の上を、左手で包み、ひざの上で全身の力をこめた。しかし、級の中でも小柄で、きゃしゃな自分の力では、ビクともしない。（中略）
左手の下でにぎりしめた右のてのひらの皮が、少しむけて、ヒリヒリする。僕はかんしゃくを起こして、ナット・クラッカーを卓の上へ放り出した。クラッカーはくるみの皿に激しく当たって、皿は割れた。くるみが三つ四つ、卓からゆかへ落ちた。
そうするつもりは、さらさらなかったのだ。ハッとして、いすを立った。
僕は二階へかけ上がり、勉強机にもたれてひとりで泣いた。その晩は、母の病室へも見舞いに行かずにしまった。
しかし、幸いなことに、母の病気は翌日から小康を得て、僕は日光へ遠足に行くことができた。
ふすまをはらった宿屋の大広間に、ズラリとふとんをしきつらねたその夜は、実ににぎやかだった。果てしなくはしゃぐ、子供たちの上の電燈は、八時ごろに消されたが、それでも、なかなかさわぎはしずまらなかった。
いつまでも僕は寝つかれず、東京の家のことが思われてならなかった。やすらかな友だちの寝息が耳につき、覆いをした母への電燈が、まざまざと眼に浮かんできたりした。僕は、ひそかに自分の性質を反省した。この反省は、僕の生涯で最初のものであった。

（永井龍男「胡桃割り」）

読解問題 4月4週分

問1　読解マラソン集1番「ジュースを飲んだら」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　ゴミが増える以上に、焼却炉や埋立地を作ることが、ゴミ問題を解決する道である。
B　これまでゴミがあまり問題になっていなかったのは、ゴミが「見えなく」なっていたからである。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集1番「ジュースを飲んだら」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　ゴミ問題を根本的に解決するためには、ゴミを増やさないようにすることだ。
B　生活が豊かになっても、ゴミが増えるのはあたりまえではない。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集2番「つゆのまだ晴れきらない」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　牛肉屋さんが来るのはめずらしいので、子供たちはその顔をよく覚えていた。
B　牛肉屋さんは、月に一度決まった日に村にやってきた。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集2番「つゆのまだ晴れきらない」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　次郎は、牛肉のスープが飲めることを考えると、わくわくしてきた。
B　次郎が上気したように顔をほてらせたのは、自分の思いつきが少し恥ずかしかったからである。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集3番「人間にとって一生のうちで」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　人間にとっては、毎日が大事な日である。
B　人間にとって、いちばん大事な時期は、少年時代である。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集3番「人間にとって一生のうちで」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　少年時代に、自分が幸福だと思っている人はあまりいない。
B　少年のころは、大人になったときよりも、純粋に夢中になれる。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集4番「いったい、ジャングルの破壊は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　森の木を切って燃料にするのではなく、燃料をガスや電気にかえることが、ジャングルを守る道である。

B　熱帯の木材は高く売れるので、途上国にとって木材の輸出は経済の柱となっている。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集4番「いったい、ジャングルの破壊は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　先進国の人々が暮らし方を少し変えるぐらいでは、ジャングルの減少を食い止めることはできない。
B　ジャングルに木を植えても、それがそのジャングルに住む人々にとっては役に立たないこともある。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 5月4週分

問1　読解マラソン集5番「わが家の遠足のお弁当は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　父は、海苔巻やかまぼこのはじっこを食べるのが好きだった

B　私は、遠足の海苔巻にはじっこを入れてもらいたいと思っていた

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集5番「わが家の遠足のお弁当は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　昔、私は海苔巻の端っこをたくさん食べる父を少し恨んでいた

B　私は、子供のころ、父のことを貯金箱のドラキュラに似ていると思っていた

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集6番「気圧のせいで、耳がへんなんだ」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　飛行機が雲の上に出ると、真っ暗な空がひろがっていた

B　飛行機が着陸しようとしているのは、未来都市である

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集6番「気圧のせいで、耳がへんなんだ」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　飛行機は、高速道路に着陸しそうになった

B　サトルは、お父さんとあまり話をしていない

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集7番「疲れて帰ってきてみりゃ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　喧嘩している二人を見て、お父さんは喧嘩の理由を問いただした

B　姉は、父に喧嘩の理由を説明した

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集7番「疲れて帰ってきてみりゃ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　私は、ときどきお寺に泊まることがある

B　私は、一人きりになってから、自分も悪いのかもしれないと思った

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集8番「南博人は従順な子であり」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　南は、いつも先生の言うことは素直に聞いていた

B　南は、道からはずれて、山の頂上を目指した

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集8番「南博人は従順な子であり」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　南は、もと来た道に戻ることはあきらめた

B　その山の頂上は、一つではなかった

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 6月4週分

問1　読解マラソン集9番「私たち脳の研究者は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　記憶の実験をする材料としては、本当は人間の方がネズミよりも優れている
B　人間は、そのときの気分で左右されることがあるが、ねずみはにはそういうことはない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集9番「私たち脳の研究者は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　コンピュータは1回で記憶できるが、ネズミは何回も繰り返して記憶する
B　脳は、失敗が少ないほど正しい記憶ができる
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集10番「わたしは窓を開いて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　サワンと空飛ぶがんは、お互いの鳴き声が聞こえていた
B　サワンは、普段から私の言いつけを無視することが多かった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集10番「わたしは窓を開いて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　私は、サワンが屋根に上がらないようにするため、サワンの足をひもで結ぼうとした
B　サワンは、屋根に登って鳴く習慣覚えてから、毎晩夜ふけになると鳴くようになった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集11番「まったくくまどもは」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　小十郎は、くまうちの猟師だが、自分の仕事が好きでなかった
B　小十郎は、赤痢にかかったが死ななかった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集11番「まったくくまどもは」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　だんなは、小十郎が知らないのをいいことに、小十郎からくまの毛皮を安く買っている
B　きつねけんでは、だんながいちばん強い
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集12番「ちょうど、その前の年」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　僕の家に、医者が二人来ていた
B　母は、近くの病院の病室にいる
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集12番「ちょうど、その前の年」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　僕は、くるみを食べるのが好きだったわけではない
B　くるみは、結局一つも割れなかった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

4 ～ 6 月

小1 コード：nane パス：	小2 コード：nane パス：	小3 コード：nane パス：
小4 コード：nane パス：	小5 コード：nane パス：	小6 コード：nane パス：
中1 コード：nane パス：	中2 コード：nane パス：	中3 コード：nane パス：
高1 コード：nane パス：	高2 コード：nane パス：	高3 コード：nane パス：

1 ～ 3 月

小１ コード：nane パス： PDF	小２ コード：nane パス： PDF	小３ コード：nane パス： PDF
小４ コード：nane パス： PDF	小５ コード：nane パス： PDF	小６ コード：nane パス： PDF
中１ コード：nane パス： PDF	中２ コード：nane パス： PDF	中３ コード：nane パス： PDF
高１ コード：nane パス： PDF	高２ コード：nane パス： PDF	高３ コード：nane パス： PDF